

宝塔品二十箇の大事

第一 宝塔の事 文句の八に云はく「前仏已に居し今仏並びに坐す。当仏も亦然なり」と。

御義口伝に云はく、宝とは五陰なり、塔とは和合なり、五陰和合するを以て宝塔と云ふなり。此の五陰和合とは妙法の五字なりと見る、是を見とは云ふなり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る者は見宝塔なり。

第二 有七宝の事

御義口伝に云はく、七宝とは聞・信・戒・定・進・捨・慙なり。又云はく、頭上の七穴なり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉るは有七宝の行者なり云云。

第三 四面皆出の事 文句の八に云はく「四面出香とは四諦の道風四徳の香を吹くなり」と。

御義口伝に云はく、四面とは生老病死なり。四相を以て我等が一身の塔を莊嚴するなり。我等が生老病死に南無妙法蓮華經と唱へ奉るは、併ら四徳の香を吹くなり。南無とは楽波羅蜜、妙法とは我波羅蜜、蓮華とは浄波羅蜜、經とは常波羅蜜なり云云。

第四 出大音声の事

御義口伝に云はく、我等衆生の朝夕吐く所の言語なり。大音声とは、権教は小音声、法華經は大音声なり。二十八品は小音声、題目は大音声なり。総じて大音声とは大は法界なり。法界の衆生の言語を妙法の音声と沙汰するを大音声とは云ふなり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉るは大音声なり。又云はく、大とは空諦、音声とは仮諦なり、出とは中道なり云云。

第五 見大宝塔 住在空中の事

御義口伝に云はく、見大宝塔とは我等が一身なり、住在空中とは我等衆生終に滅に歸する事なり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉りて信心に住する処、空中に住するなり。虚空会に住するなり。

第六 国名宝浄 彼中有仏 号曰多宝の事

御義口伝に云はく、宝浄世界とは我等が母の胎内なり、有仏とは諸法実相の仏なり。愛を以て多宝仏と云ふなり。胎内とは煩惱を云ふなり。煩惱の淤泥の中に真如の仏あり。我等衆生の事なり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉るを当体蓮華の仏と云ふなり云云。

第七 於十方国土 有說法華經 處我之塔廟 為聽是經故 涌現其前

為作証明 讚言善哉の事

御義口伝に云はく、十方とは十界なり、法華經とは我等衆生流轉の十二因縁なり。仍って言語の音声を指すなり。善哉とは善悪不二、邪正一如なり。今日蓮等の類南無妙法

蓮華經と唱へ奉る処を多宝涌現と云ふなり。

第八 南西北方 四惟上下の事

御義口伝に云はく、四方四惟上下合して十方なり、即ち十界なり。十界の衆生共に三毒の光之有り。是を白毫と云ふなり。一心中道の智慧なり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉るは十界同時に光指すなり。諸法実相の光明なるが故なり。

第九 各齋宝華滿掬の事

御義口伝に云はく、宝華とは合掌一念三千の所表なり、各とは十界なり、滿の一字を一念三千と心得べし。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉るは仏に宝華を奉るなり。宝華は即ち宝珠なり、宝珠は即ち一念三千なり。「合掌し敬心を以て具足の道を聞きたてまつらんと欲す」とは是なり云云。

第十 如却関鑰 開大城門の事

科註の四に云はく、此の開塔見仏は蓋し所表有るなり。何となれば則ち開塔即開権なり。見仏即顕実なり。是亦前を証し復將に後を起こさんとするのみ。如却関鑰とは却は除なり。障除こり機動ずることを表はす。謂はく、法身の大士惑を破し理を顕はし道を増し生を損するなりと。

御義口伝に云はく、関鑰とは謗法なり、無明なり。開とは我等が成仏なり。大城門とは我等が色心の二法なり。大城とは色法なり。門とは口なり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る時、無明の惑障却けて己心の釈迦多宝住するなり。関鑰とは無明なり、開とは法性なり、鑰とは妙の一字なり。天台云はく「秘密の奥蔵を発く之を称して妙と為す」と。妙の一字以て鑰と心得べきなり。此の經文は謗法不信の関鑰を却けて己心の仏を開くと云ふ事なり。開仏知見之を思ふべし云云。

第十一 撰諸大衆 皆在虚空の事

御義口伝に云はく、大衆とは聴衆なり、皆在虚空とは我等が死相なり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る者は、生死即涅槃と開覚するを説くなり。生死を皆在虚と心得べきなり。撰とは被撰なり、凡夫即極なり、煩惱即菩提・生死即涅槃と被撰するなり。大地とは色法なり、虚空とは心法なり。色心不二と心得べきなり。虚空とは寂光なり。又云はく、虚空とは蓮華なり。經とは大地なり、妙法は天地、虚空とは中なり。一切衆生・仏・菩薩蓮華に座るなり。此を妙法蓮華經と説かれたり。經に云はく「若し仏前に在らば蓮華より化生せん」と。

第十二 譬如大風 吹小樹枝の事

御義口伝に云はく、此の偈頌の如清涼池と譬如大風と燃大炬火とは三身なり。其の中に譬如大風とは題目の五字なり。吹小樹枝とは折伏門なり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉るは大風の吹くが如くなり。

第十三 若有能持 則持仏身の事

御義口伝に云はく、法華經を持ち奉るとは我が身仏身と持つなり。則の一字は生仏不二なり。上の能持の持は凡夫なり。持つ体は妙法の五字なり。仏身を持つと云ふは一

々々皆金色の仏体の故なり。さて仏身を持つとは我が身の外に仏無しと持つを云ふなり。理即の凡夫と究竟即の仏と二無きなり。即の字は「即の故に初後不二」の故なり云云。

第十四 此經難持の事

御義口伝に云はく、此の法華經を持つ者は難に値はんと心得て持つなり。されば則為疾得無上仏道の成仏は、今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る是なり云云。

第十五 我則歡喜 諸仏亦然の事

御義口伝に云はく、我とは心王なり、諸仏とは心数なり。法華經を持ち奉る時は心王・心数同時に歡喜するなり。又云はく、我とは凡夫なり、諸仏とは三世諸仏なり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へて歡喜する是なり云云。

第十六 是名持戒の事

御義口伝に云はく、此の經文にて三学俱伝するなり。虚空不動戒・虚空不動定・虚空不動慧、三学俱に伝ふるを名づけて妙法と曰ふと。戒とは色法なり、定とは心法なり、慧とは色心二法の振る舞ひなり、俱の字は南無妙法蓮華經の一念三千なり、伝とは末法万年を指すなり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉り、権經は無得道、法華經は眞実と修行する、是は戒なり、防非止惡の義なり。持つ所の行者決定無有疑の仏体と定む、是は定なり。三世の諸仏の智慧を一返の題目に受持する、是は慧なり。此の三学は皮肉骨・三身・三諦・三軌・三智等なり。

第十七 讀持此經の事

御義口伝に云はく、五種の修行の讀誦と受持との二行なり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉るは讀なり。此の經を持つは持なり。此經とは題目の五字なり云云。

第十八 是真仏子の事

御義口伝に云はく、法華經の行者は眞に釈迦法王の御子なり。然る間王位を継ぐべきなり。悉是吾子の子と是真仏子の子と能く能く心得合はずべきなり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る者は釈迦法王の御子なり。

第十九 是諸天人 世間之眼の事

御義口伝に云はく、世間とは日本国なり、眼とは仏知見なり。法華經は諸天世間の眼目なり。眼とは南無妙法蓮華經なり、是諸の天人世間の眼なり。又云はく、是諸仏の眼目云云。此の眼をくじる者は禅・念仏・眞言宗等なり。眼目とは目聞なり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉るは諸天世間の眼目に非ずや。

第二十 能須臾説の事

御義口伝に云はく、能の一字之を思ふべし。説とは南無妙法蓮華經なり。今日蓮等の類能須臾説の行者なり云云。